

富來先生の思い出

橋本操 六

昭和三十一年四月大分県立教育研究所に奉職し、『大分県史料』の編集に参加させて頂くようになったのが、先生との出会いの最初である。以来三十五年に第一期事業十三巻が刊行されるまで御指導をいただいた。大分市茶屋旅館での編集作業の夕食時、少々お酒の入った清原貞雄先生が、「ドイツ留学中に体験された(?)「飾り窓の女」の話で盛り上ったあと、「橋本君、新婚の我々は今晚は失礼して帰ろう」と言っ、二人でそそくさと旅館を後にした記憶も鮮明に甦って来る。三十三年秋だったように思う。

三十六年四月に県社会教育課に転勤してからは、文化財専門委員と担当者として指導を受けた。先生は歴史学以外の民俗・考古学等の分野にも造詣が深く、県教育委員会が実施した丹生川遺跡や雄城台遺跡の発掘調査にも事前に調査把握されていた。中でも雄城台高校建設に際しての事前調査には、先に手がけた先生の同意を強く求める担当者として、志手一組の御自宅を訪問したことも強烈な印象として残っている。考古学に携わる人の仁義だったのだろうか。専門委員も機をみて辞任された。

昭和五十一年『大分県史』編纂事業がスタートした。このころ既に先生は病気がちで、間々編纂審議会や編集会議を欠席されるようになっていた。県史料編集時代の先生は、人差指・中指はもちろん、唇までニコチンで茶色になるほどのヘビースモーカーで、唇についたタバコのクズをペッペッと吐きながら、口角泡を飛ばす論議も思い出の一つである。先生の学問の根幹をなすのだろうか。マックス・ウエーバーが連発されたと記憶している。

病気がちの先生は、周囲への気配りに繊細な神経を使っていたのが、健康回復へのブレーキになったようにも思えてならない。訪問先への花一輪の持参は、単にロマンチストだけではすまされないのではなからうか。